度会町（わたらい）

文化財
度会町

十一面観音（じゅういちめんかんのん）

度会郡度会町注連指（しめさす）にある正法寺（しょうほうじ）には、国の重要文化財に指定されている木造十一面観音の立像（りつぞう）が安置（あんち）されています。

十一面観音像とは、通常、頭上に慈悲（じひ）や憤怒（ふんぬ）の相（そう）などをもつ九つの面と、その後部と頂（いただき）にある各一体の化仏（けぶつ）（さまざまな姿となって現れる仏）とを合わせて、十一面を持つ観音像のことです。

本体は高さ約1mで、クスの木を使用した一木造（いちぼくづくり）（頭部と胴部とが一本の木で作られている）の彩色像（さいしきぞう）です。頭部の化仏の多くは欠損（けっそん）し、五体を残すだけになっています。本像は、本体・台座・光背（こうはい）ともに当初のままであり、鮮やかな色を何色も塗（ぬ）ってあるあとがわずかに確認できますが、現在は剥落（はくらく）が多く、当初の華麗（かれい）な様子を想像するのは難しくなっています。

正法寺の十一面観音菩薩縁起（ぼさつえんぎ）（観音像の説明板）には、平安時代の末ころ、平家の武将（ぶしょう）が、疫病退散（えきびょうたいさん）の祈願（きがん）を込（こ）めて当地に安置したことが記されています。

十一面観音（伊勢志摩きらり千選提供）

【→P111＊37】

▪ あなたの住んでいる地域にある仏像などの文化財について調べてみましょう。

歴史
度会町

一之瀬城址

度会郡度会町にある一之瀬城址は、東に一之瀬川、北に大谷川、南に前川が流れ、三方を川にはさまれた場所にあります。

今からおよそ650年前の南北朝争乱の頃、この辺りで大きな力を持っていた愛洲氏の城跡で、一時、後醍醐天皇の皇子宗良親王がいたといわれています。

城跡には、北側と西側に、敵の侵入を防ぐための空堀をめぐらした台地があります。さらにその北側に二条の空堀があります。南側は、一之瀬神社の社殿により改変されていますが、二条の空堀が狭い尾根にみられます。その南端には見張台に格好の岩場となり、崖に直面しています。また、東の山すそには南北に土手がのびており、御所裏とよばれる一之瀬川の段丘に続いています。

【→P33、49、55】

一之瀬城址（伊勢志摩きらり千選提供）

▪ 時代によって、城にはどんなちがいがあるか調べてみましょう。

歴史
度会町

森添遺跡

度会町内には、およそ60もの遺跡があります。その中でも宮川沿いの久具都比売神社の近くにある森添遺跡からは、縄文時代の後期から晩期（およそ3000年前）を中心とした土器、石器、装身具等が数多く出土しています。また、竪穴住居跡も10か所以上確認されています。

森添遺跡の特徴としては、朱のついた土器と、東北や北陸、中部高地など他地域系の土器が多く発見されたことが挙げられます。このことから、森添遺跡では、特に「朱」（赤色の顔料）を生産し、他地方にも供給し、盛んに交易があったこと等が想定されます。

【→P44】

縄文時代といえば、狩猟・漁労・採集など「一次産業」にのみ従事して自給生活を送っていたと思いがちですが、森添遺跡では地域間で経済的な活動をしていたと考えられています。

少し下流の万野遺跡は、石鏃や縄文土器片がたくさん落ちており、縄文前期（およそ6000年前）を中心とした大型のムラ跡だろうと考えられています。

森添遺跡の出土品
（伊勢志摩きらり千選提供）

【→P111＊65】

▪ あなたの住んでいる地域にある縄文時代や弥生時代の遺跡を調べてみましょう。

年中行事
度会町

麻加江かんこ踊り

度会郡度会町麻加江には、古くから伝わるかんこ踊りがあります。麻加江のかんこ踊りは、頭に「しゃぐま」とよばれる馬の毛で作られた被りものをつけ、法螺貝に合わせて「かんこ」（太鼓）をたたきながら舞います。150年ぐらい前から伝わっているとされる踊りで、町の無形民俗文化財に指定されています。

かんこ踊りは、お盆の供養として毎年8月15日の夜、慶林寺の庭で行われます。大正年間まで、度会町内の他の地区でも行われていましたが、今では麻加江のみが当時の面影を伝えています。踊りには、綾踊りを舞う童女30名と、五所踊りなどを舞う男子青年団を中心とする地区民約70名が参加します。太鼓・法螺貝・鉦（たたき鐘）などの賑やかな囃と音頭取りを先頭にして、大名行列を模した行列の入場から始まります。

踊りは10種類ほどありますが、現在踊られているのは4種類ほどです。各集落の踊りは秘伝となっており、練習は人里離れた谷間でひそかに行われたといわれています。

麻加江かんこ踊り（伊勢志摩きらり千選提供）

▪ あなたの住んでいる地域に古くから伝わる行事や祭りについて調べてみましょう。

COLUMN コラム 三重のかんこ踊り

太鼓を胸につける踊りは全国各地にありますが、三重県内では「かんこ踊り」として、多くの地域で伝承されてます。

かんこ踊りは、初盆供養の精霊送りとして踊られたり、豊作祈願や雨乞いなど神への感謝の気持ちを表すために踊られたりします。

かんこ踊りの大きな特徴になっているのは、被りものや背中に付ける華やかな飾りです。それらには、地域によって様々な種類があります。

猟師かんこ踊り（松阪市教育委員会提供）

「花笠」　○松阪市を中心に分布（松ヶ崎、猟師かんこ踊りなど）
頭に花笠をつけ、手拭いで顔を覆って踊る。

「鳥毛」　○津市を中心に分布（香良洲町の宮踊りなど）
黒い鳥の羽根の飾りを被って踊る。

「馬毛」　○伊勢市を中心に分布（円座、佐八かんこ踊りなど）
顔を覆うように白馬の尾で作ったしゃぐまを被って踊る。

「オチズイ」　○伊賀市を中心に分布（勝手神社神事踊りなど）
紙の花で飾った割竹を背負って踊る。